

Iribe, Paul

Les robes de Paul Poiret.

Paris, P. Poiret, 1908. (文献番号9-71)

Hiler p.467 Colas 1517

Lepape, Georges

Les choses de Paul Poiret vues par Georges Lepape.

Paris, Maquet (impr.), [1911?] (文献番号9-72)

Hiler p.539 Colas 1837

イリーブ著 ポール・ポワレの衣装 および ルパーブ著 ポール・ポワレの作品

この2冊のポワレ (Paul Poiret 1879—1944) の作品集は、いずれも自分の宣伝用としてそれぞれイリーブとルパーブに描かせたアルバムで、前者は250部、後者は1000部刷られた。解説は全くない。当時としては珍しくポショワールの手づくり本である点、意表をつく画期的なものであり、奇想天外な自己顕示欲をもつポワレなればこそ可能であったとみられる。というのも、当時のモード雑誌は世紀末以来すでに大量生産の洗礼を受けたものが主流となっており、いわゆるアート紙などに網目写真版で印刷された単色刷りか、あるいは同じ方式によって3色重ね合せた、当時のいわゆる原色版のいずれかによっていた。典型例に Les Modes, La Mode Pratique (その項参照)、イギリスでは The Queen その他がある。

それにひきかえイリーブのは銅版に似せたペン画の墨線を主体にし、透明な色インクで彩色した10枚のオランダ紙のプレートからなっている。これに対しルパーブのは黄土色と橙色の2色の基本線を石版刷りにし、それを土台にしてグアッシュ (不透明水彩) を用いたポショワール彩色の12枚のプレートからなっている。用紙には日本の局紙とオランダ紙とが併用され、画面サイズも不定で、全くの手づくりであることがわかる。こうして、ポワレのこの二つのデザイン画集は、1930年代初めまでに続くアール・デコ様式の黄金期——事実、この時期にはユニークで質の高いファッション挿画本や雑誌が多数刊行された——の火付け役となったばかりか、彼独特の corsage 無用の ^{きや} 靴形服ないし筒形服を定着させる契機を開いた点、まさしく現代服にとつての記念碑となったのだった。

ポワレは1898年、ドゥーセの店のレギュラーとなって人気女優サラ・ベルナルの舞台衣装などにもタッチしているが、支配人と合わず、1903年には独立して24歳で開店し、1906年には注文に応じきれないまでになっていた。その前年、ノルマンディ生れのドニーズと結婚したポワレは、19歳の彼女のために優美な筒型服をデザインしている (図参照)。

一方、ポール・イリーブ (Paul Iribe 1883—1935) は1901年雑誌『ル・リール (笑い)』の挿絵でデビュー、わけでも1906年から10年まではジャン・コクトーらとともに『ル・テモワン (証人)』という雑誌を発行し、それに独特の挿絵を描き評判となり、^{*} 愉快な抗議者、といわれた。彼は1915年から30年にかけてアメリカに渡り、家具、モード、織物などのデザインの他、

ジャーナリズム界の種々の面で多彩な活躍をみせた。

また、ジョルジュ・ルパーブ (Georges Lepape 1887—1971) はポワレに依嘱されたころポワレ店のラベルをデザインしたり、『ラール・エ・ラ・モード』誌などに挿絵を描いていたが、まだ余り知られてはいなかった。彼が有名になるのは本書を描いた1911年以降であり、この意味でも本書は彼にとって確かな飛躍台となったのであった。なぜなら、この翌年から彼は『ガゼット・デュ・ボン・トン』など第一級のモード誌に描いているからである。

ポワレについては『1925年様式』の著者として名高いイタリアのヴェロネージ女史もこう書いている。「1910年代、パリのオートクチュール、装飾美術、社交界の有力なからくりのすべては、この人物を中心として動いたのである。太っちょで、精力旺盛で、聡明な、誇大妄想ぎみの……この人物、それが大洋裁師ポール・ポワレそのひとである。(中略)(彼は)稀にみる心理的鋭敏さで時代精神、厳密に言えば爛熟しすぎた時代精神を把握しながら、ポワレは趣味を左右する審判官となり、さらには、頹廢し、日常生活のうわべだけのパレードへと墮した時代のスペクトルを、花火入りの一大終曲として奏でた。」と述べる一方、「(彼は) デュフィヤルパーブ、イリーブといった申し分のない芸術家たちを自作のデザインに重用したことで、ポワレの作品は印刷美術の領域における芸術作品にもなった。ポワレは流行衣装の製作行為を印刷美術の製作行為と結びつけることによって趣味の統一のために貢献し、この趣味の統一によってこそ、この時代は独自の相貌と独自の特徴ある様式とを自己のものにできたのである。」(西澤信彌訳)とも書いている。図左は、イリーブ画。中央の衣装はポワレが1906年、娘ロジーの洗礼式に際してポワレ夫人の着用した「ローラ・モンテ」と名づけたドレス。図右はルパーブ画。ドレスと毛皮で縁取ったラップコート。(石山)

